

映画『阿賀に生きる』の関連資料
スチール写真(村井勇撮影)
牛腸茂雄の写真と石塚三郎旧蔵写真
佐藤哲三の絵画
ほか 佐藤真の著書、
映像関連の資料などを
砂丘館ギャラリー(蔵)で展示



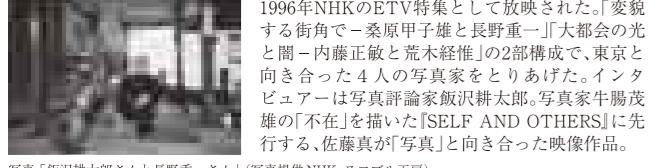
佐藤真(1996年)
撮影:伊藤芳保

会期中の催し(全て 共催:新潟と会)

9月18日 mon. | ギャラリーツアー(展示解説)
10:30-11:30 案内人:大倉 宏(砂丘館館長)

●参加無料(予約不要・直接会場へ) ●定員先着20名

9月24日 sun. | 佐藤真 作品上映
13:00-14:30 『写真で読む東京』DVD上映



写真「飯沢耕太郎さんと長野重一さん」(写真提供:NHK・スコブル工房)

●参加無料(予約不要・直接会場へ) ●定員先着40名

9月24日 sun. | ギャラリートーク1「佐藤真と写真」*
15:00-16:30 ・飯沢耕太郎(写真評論家) 聞き手/大倉 宏(砂丘館館長)

10月4日 wed.
19:00-20:30 | ギャラリートーク2
「佐藤真はアートとどう向き合ったか」*
・榎木野衣(美術評論家)
・清田麻衣子(『日常と不在を見つめて』編集・里山社)
・大倉 宏

*ギャラリートーク ●参加費各500円●要予約●定員各40名

*予約は砂丘館へ ●TEL.FAX.025-222-2676
●E-mail:sakyukan@bz03.plala.or.jp

飯沢耕太郎(いいざわ こうたろう)

写真評論家。著書に『写真美術館へようこそ』(サントリー学芸賞)、『デジグラフィ』、『現代日本写真アーカイブ』等がある。

榎木野衣(さわらぎ のい)

美術評論家。多摩美術大学教授。著書に『日本・現代・美術』、『爆心地』の芸術』等がある。『後美術論』で第25回吉田秀和賞受賞。

清田麻衣子(きよた まいこ)

里山社主宰。編集者・ライター。2016年『日常と不在を見つめて ドキュメンタリー映画作家 佐藤真の哲学』を刊行。

同時期開催

映画監督・佐藤真と新潟と
「阿賀に生きる」25th Memorial | 2017
9月23日 sat. - 10月6日 fri.

特集上映「佐藤真が遺したもの」

会場:新潟・市民映画館シネ・ウインド(新潟市中央区八千代2-1-1)



- 上映作品『阿賀に生きる』『阿賀の記憶』
『SELF AND OTHERS』『まひるのはし』『花子』
『エドワード・サイード OUT OF PLACE』ほか
- トーク&ライブコメントセッションもあります

前売券◆1,000円 当日料金◆1,200円 シネ・ウインド会員◆1,000円

*万代シテイ第2駐車場の3時間無料券を発行します。入場受付時に駐車券をご提示ください。

*特別企画のため、シネ・ウインド会員鑑賞券・各種無料鑑賞券はご利用いただけません。

主催:新潟と会 問合せ:TEL.025-243-5530(シネ・ウインド)
<https://satomakotoandniigata.tumblr.com/>

書籍販売

『日常と不在を見つめて ドキュメンタリー映画作家 佐藤真の哲学』

佐藤真に惹きつけられた32人の書き下ろし原稿とインタビュー、佐藤真の単行本未収録原稿を含む傑作選を収録。<http://satoyamasha.com/?p=759>

里山社刊/四六版/並製本/カバーあり/368頁(カラー16頁含)/定価3,500円(税別)

砂丘館、シネ・ウインドの他、北書店(中央区医学町通)、BOOKS f3(中央区沼垂東)、英進堂書店(秋葉区程島)など、新潟市内書店で販売。

「言葉に出したとたんに
急に空々しくなってしまう気持ちや、
とても言葉にしようがない感情を
表現するのがドキュメンタリー映画だ」

佐
藤
真

映画監督・佐藤真の新潟

— 反転するドキュメンタリー —

2017
9月15日 fri. - 10月15日 sun.

9:00-21:00 〈観覧無料〉
休館日:月曜(9月18日、10月9日は開館)、
9月19日(火)、9月26日(火)、10月10日(火)
会場/砂丘館ギャラリー(蔵)
主催/砂丘館 協力(一部事業共催)/新潟と会



砂丘館

旧日本銀行新潟支店長役宅

指定管理者/新潟絵屋・新潟ビルサービス特定共同企業体

協賛

新潟ビルサービス

株式会社

NSGグループ

株式会社

ナレッジライフ

藤田金属

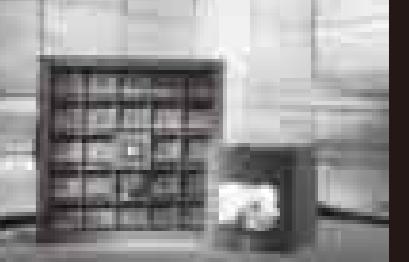
九星本店

郷土の文化に親しむ会

『阿賀に生きる』
スチール撮影:村井勇



『まひるのはし』
©「まひるのはし」製作委員会
1998年



『SELF AND OTHERS』
©牛腸茂雄



『阿賀の記憶』
©カサマフィルム



撮影:佐藤真



佐藤真の映画人生

大倉 宏

1992年に誕生した『阿賀に生きる』はあいまいな映画だ。

新潟水俣病を見つめた映画であり、川と関わる生活文化を描いた映画であり、登場する老人たちの日常を浮き上がらせる映画でもある。この3面をABCとすれば、AとBとC間に明らかな主従がない。つまり「新潟水俣病を描きながら、生活文化と日常を描いた」(A[B・C])のでも「日常を通して生活文化と新潟水俣病を見つめた」(C[B・A])のでも「生活文化から日常と新潟水俣病をとらえた」(B[C・A])のでもない。いずれとも言えるようで、言えないようで、定めがたい。

かつて私はこの映画を論じ、老人たちがカメラに向かって己の日常を開いていると書いたが、同じ場面について、老人たちは日常を撮影者たちの前で演じているとした評があった。夫婦の戯れ的な場面などそうかも知れないと思うけれど、しかしそうとも言い切れないと感じる。つまり、そういう面でもあいまいなのだ。『阿賀に生きる』はこうした、多様な水準でのあいまいさに満ちた映画であり、そのことが、2017年の現在も生き続けるこの映画の「息の長さ」と関わっているという気がする。

反転图形と呼ばれるものがある。図柄を見つめていると、その図柄を取り囲む背景が、急に図柄になって見えてくる。そのとき最初の図柄は「背景」になり、見えなくなる。第2の図柄を見続いていると、急にそれが消えて第1の図柄が浮上する。その反転が繰り返される。定まることがない。

第2作「まひるのはし」の完成前後の頃だったろうか、公開の場で、佐藤と対談した。眞の対談は前晩の酒席で、本番はその残り滓(かす)のようなものだったと佐藤自身が書いている。その酒席で佐藤が映画と違い絵には偶然は介在しないのではないか、と述べたのに対し、そんなことはない、絵という場にも偶然の風は吹く。偶然こそが、絵に生命を与えると私は言った。偶然とは作者の意図、図柄を揺らし、ときに反転させる外のことである。

そう語ったとき、私は(佐藤には言わなかったが)ある一枚の具体的な絵のことを考えていた。佐藤哲三の「みぞれ」(1958年)である。

「みぞれ」が数ヶ月に及んだ制作過程のなかで劇的な変貌を遂げていったことに関しては証言がある。それは下絵が完成作に変貌して行くという類いのものではなかった。おそらく最初にあるイメージが、図柄があった。しかし描く過程で異なるものが、違う図柄が侵入し、当初の図柄を背景に押しやる。当初の図柄もまた浮上を試み、両者は、あるいはもっと多くのなにものかが、組んず解(ほぐ)れつしながら坂を転げ落ちるようにして、絵が豊穣なあいまいさに向かって、旋回し、膨張していく。そのようにして生まれた絵だと、私は感じる。

『阿賀に生きる』もまた、撮影の現場において、難航を極めた編集の過程で、さまざまな図柄が、細部が、映像の意味が、反転しつづけ、そのどれかが最終的に優勢になり、他を押しやり、主とはならない—あいまいが、限りなく度を深め、ゆるやかに結晶する場所にまで行き着いた映画だった。銀を掘ろうとして金を掘り当ててしまうことが起こったのではないかと、かつて書いたのは、そういう意味でもあったと今は考える。

「日常」と「不在」は、ドキュメンタリーという、テーマやモチーフという一義性へ傾きがちな表現ジャンルにおいて、処女作が掘り当てたこの反転性(あいまいさ)にいかに再会し、めぐりあっていけるかを問う中で、佐藤が引き寄せた言葉だったのではないだろうか。

1993年に書いた「世界の始まる地点」という批評文で、私は画家佐藤清三郎と写真家牛腸茂雄とともに『阿賀に生きる』を論じ、未発表原稿のまま人を介して佐藤に送った。佐藤が牛腸を知ったのは、それがきっかけであり(と、佐藤自身が書いてくれている)、牛腸に関心を深めた佐藤は、やがて『SELF AND OTHERS』という第3作を生んだ。私は牛腸の写真で、人々はカメラに己を開いていると書いたのだが(そこに『阿賀に生きる』との共通点を見た)、佐藤自身は同じ写真に「心をザワザワといらつかせる」感触を感じ取り、写される当人が意識しないものを掬

いとる写真家の視線に「悪意」の言葉をふりあてた。そしてドキュメンタリーもまた悪意を持たねばならないと書いた。

その強い言葉に、言い方に、衝撃を覚えたが、写真やドキュメンタリーの規範が「善」であり、あったとするならば、その善(という図柄)を相対化する外力を悪意と呼んだのだと解し、納得しようともした。その佐藤の言葉と完成した映画を通じて、私の中の牛腸の印象も変容し、あいまいになる体験が訪れた。牛腸茂雄の写真もまた反転图形的性格に満ちていたのだった。

それに先立つ『まひるのはし』の制作に、佐藤真は洲之内徹の『気まぐれ美術館』を読み、考えをめぐらしていた*。私は洲之内の美術批評で佐藤哲三を教えられ、新潟に移住した人間である。だから、その洲之内に佐藤が興味を寄せたことに奇遇を感じたが、その関心の寄せようがまた佐藤的だと思ったのを覚えている。佐藤は、洲之内が、論じようとする絵そのものとは無関係に思えるきわめて個人的な体験を延々と書き連ねながら、絵とそれを見る洲之内の切羽詰まった関係を、最終的に鮮やかに浮かび上がらせてしまう手際に感嘆し、「障害者のアート(最近の言い方では「アールブリュット」)」と自分自身の、そのようなプライベートな関係が、ひびのように入り込まなければ、この映像は一義的な底の浅いものになるだろうと考えたのだった。

佐藤真は第5作で、また新潟を訪れる。石塚三郎という阿賀野市生まれの写真家が、明治の町や村に暮らす人々を撮った写真がモチーフとなるはずの撮影は、最終的にそのモチーフを消去してしまい、ほとんど図柄のない映画となった。かつてそこで『阿賀に生きる』を撮った自分自身のプライベートな体験にひたるようでいて、そのプライバシーさえも消去し、反転させようとする、異様と言つていい諸方が網を引き合う映像が生まれた。

水俣病も、新潟水俣病も、近代化という力が、前近代的な人々の暮らしを、日常性を、攪乱(かくらん)させた出来事だった。その事件がなければ、『阿賀に生きる』は生まれなかっただ。同じく新潟の前近代的な暮らしを記録した映像『越後奥三面 山に生かされた日々』(姫田忠義監督 1984年)が、集落を水没させるダム建設という出来事がなければ作られなかっただろうように。姫田監督の映画を、私は未だに見る機会を得ずにいるのだが、その映画のスタッフだった田口洋美の『越後三面山人記』を読んだばかりである。しかし田口のフィールドワークも、姫田の

映像記録も、佐藤のドキュメンタリーも、近代に属する力であることを、一方で忘れてはならない。「近代」それ自体も、あいまいな言葉なのだが、仮にそれを戦後日本を形成した主導力と言ってみる。佐藤も田口も私も、1957年(昭和32年)の生まれで、その前年に日本の実質国民総生産が戦前の水準を越え「もはや戦後ではない」が流行語となった。主動力は復興を越えて日本社会の「成長」を押し進めた。そのような力の息づき、めぐるただなかで、人生の形成期を生きた世代である。

佐藤真は東京に、カメラを向けることを考え続けていた。東京はその主動力が集中して作用した地域だった。主動力は善なのか、悪なのか。どちらもあるのか、ないのか。それとともに生きてきた私たちには定めがたい、怪物のようなものだ。佐藤は映画を生んだだけではなく、映画についての言葉を多く刻んだ。明快で、時に挑戦的な書きぶりで、あいまいを、反転するドキュメンタリーの可能性を語り続けた。

あいまいは魅力的な力であり、危険な誘惑でもある。佐藤真は明快さを求めるのか、不明確さを極めようとしたのか。その言葉に接し、書き手が身を置く場のあやうさに、震えた。

満ち潮と引き潮の分岐点から歩き始めなくてはならなかった日本人の人生という、路地を、隘路(あいろ)を、歩き続け、消えた人だった。

(砂丘館館長)

*そのことを私は長く忘れていたが、今回の展示準備の過程で、里山社の清田麻衣子さんに指摘され、思い出した。

佐藤真

一九五七年、青森県生まれ。東京大学文学部哲学科卒業。大学在学中より水俣病被害者の支援活動に関わる。一九八一年、「無辜(むこ)なる海」(監督:香取直孝)助監督として参加。一九八九年から新潟県阿賀野川流域の民家に住みこみながら撮影を始め、一九九二年「阿賀に生きる」を成。二ヨン国際ドキュメンタリー映画祭銀賞など、国内外で高い評価を受ける。以降、映画監督として数々の作品を発表。他に映画やテレビ作品の編集・構成、映画論の執筆など多方面に活躍。都造形芸術大学、映画美学学校で後進の指導にも尽力。二〇〇七年九月四日逝去。享年四十九歳。